

Title	行動の性質：マツクス・ユーバーの理解的方法に依る考察
Sub Title	
Author	衣斐, 久雄(Ibi, Hisao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1927
Jtitle	哲學 No.2 (1927. 7) ,p.181- 221
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000002-0181

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

行動の性質

—マックス・エーバーの理解的方法に依る考察—

1、態度及び其の理解。2、行動の主觀的意味。3、目的不合理的的過程。4、純然たる傳承的過程。社會學的觀察の諸目標。5、因果律的説明と經驗的操作。6、觀察の最低單位。行動の法的性質。7、共同關係的行動。8、社會聯合と秩序。9、反秩序的行動と社會聯合關係。10、理解的社會學の方向。附記。

衣斐久雄

1

人間の態度なるものは、それが外的なるものであつても、また内的なるものであつても、共にその過程の経過は規則的であるか、そうでなければ單なる事實の連續即ち一つの自然的關聯であるか、孰れかである。これは一般的に云ふ一切の出来事に於ける性質と、全く同じである。然し人間の態度を、もつと完全な意味で適當

に規定するならば、其の態度の過程が理解し得られるほど、明白であるやうな關聯であるか、または規則性を有するかの場合となるだらう。斯の如き人間的態度に一人或は多數人の一つの纏つた主觀的意味が加味されて居る場合には、これを行動と名付けることができる。これは内的、外的の動き方、または不作爲、陰忍等の事實をも悉く抱含するものである。

ここに人間的態度が解釋し得られると云ふのは、言ひ換へれば、人間的態度は直接に吾人に解ると云ふことである。かくして得られた人間的態度の理解には、或る特別な、量的には甚だしく程度の差異のある、性質的直證性が具はつて居る。但し此の種の理解の或るもののが斯の如き直證性を、特別に豊富に持つて居るとしても、其の故に理解それ自身が直ちに經驗的に妥當であることは證明されない。例へば過程の外的経過及び結果に於て、全く相等しい幾つかの人間的自態度が、相互に全たく相異なる動機の上に成立することが可能であるのに、此等の動機の中でも最も理解し易い直證的なものであつても、それが常に現實に動因として作用してゐるとは限らないからである。行動的關聯に對する解釋は、實際甚だしく直證的

な理解に達することができるけれども、其の理解が妥當的に説明され得るためには、矢張り他の多くの場合に恒例であるやうに、因果關係的な商量に依つて統制される必要がある。従つて目的合理的に解釋し得た理解は、最高度の直證性を有するものである。人間の目的合理的自態度と云ふのは、主觀的に充分且適當であると考へられた手段に依つて、主觀的に明瞭に把握された目的に向ひ、全然指針されてゐる行動である。目的合理的行動が吾人にとつて極めて理解し易いものであることは明かであるが、また情緒の類型的過程や、それが態度に及す類型的歸結等もまた理解し得られるものである。經驗科學的操作に於て、所謂理解し得られるものの、範圍を示す限界は、流動的であると云はねばならぬ。法悅其他の神秘的體驗、或種の精神病的關聯、また幼少なる兒童に見受けられる態度等は、吾人の理解乃至理解的説明にとつて決して容易な對象ではない、然しそれは他の過程と同じ程度にファミリアーに説明し得られないと云ふにとどまる、態度の「變態的」な何物であつてもその故に、理解の域外に逃れ去るものではない。

これに反して後に論ずる意味の正當類型に、適合する絕對的に理解し得られる

もの、また最も簡明に把握し得られるものは正しく一般的平均を遠く超越せる者の行爲でなければならない。しかし吾人が、シイザアを理解するために、シイザアたるを要せぬことは、屢々言はれる通りである。さうでなければ一切の歴史の編纂は意味を失ふだらう。寧ろ此の逆に人間の本來的な、殊に精神的な、日常の行績と見做されてゐる仕來りには、可解的なることを表示すべき上述のやうな性質上の特殊的直證性が缺けてゐるのが普通である。それ故に記憶や其他の知性の習練的現象等は單に部分的に理解し得られるのである。これは多くの精神病的過程と全く同じである。斯の如き心的過程の確定し得べき規則性は、理解的科學にては、全く物的自然の法則性と同様に取扱はれる。

2

目的合理的に表明された人間の自態度は確かに特別な直證性を多分に有してゐる。しかしそれだからと云つて、人間の態度を合理的に解釋することのみが、社會學的説明の目標となるわけではない。情緒や感情が人間の行動に際して表現

される過程は、内的にもまた外的にも甚だしく目的不合理なる場合が多い。従つて斯の如き人間的態度の社會學的説明は寧ろ目的不合理的理解の性質を帶びる。情緒乃至感情態の行動過程に於ける役割を、合理的に理解せんとして、如何なる觀察を加へるにしても、目的の概念に關聯しては必ず蹉跌せざるを得ない。此の種の役割は最早、他の目的に指針されてゐる合理的手段としては解せられない。寧ろそれ自體以上には合理的に解釋できぬ一種の目標方向として理解されなければならぬものである。勿論斯の如き役割の成立過程が、なほ心理學的に合理的な説明の對象となり得ることは明かであるけれども。

然し兎に角、社會學も歴史と同じやうに、先づ合理的に理解し得られる行動關係から始めて、出来るだけ實際的に解釋を試みる。例へば社會經濟學が經濟人を合理的に構成するやうなのと同じ方向を以つて、理解的社會學も進んで行く。人間の自態度の理解し得べき關係を、社會學的に分析して合理的な解釋が得られる場合には、此の態度は概ね最適當の理想的類型を形成する。理解的社會學の特別な對象として受け入れられるものは、人間の態度のあらゆる内的または外的狀態で

はなくして、行動である。而して行動なるものは、それが有意的な不作爲、陰忍等の消極的性質のものであつても、常に吾人にとって或る理解し得べき態度を意味して居る。即ち行動は、多少看過される嫌ひはあるけれども、必ず何人かに依つて主觀的に把握され、或は表象された一定の意味のために特殊化されてゐる或る目的に向つて指針された自態度である。例へば佛陀の冥想とか、基督の心操上の苦行等は、行動者自身にとつて主觀的に有意味な内部目的に關係する態度であり、一個の人間の財貨に關する經濟的活動は外的な目的に關係する態度である。理解的社會學にとつて特に重要な行動は次の如き性質を有する態度である。一、行動者の主觀的に意考された意味に從へば、他の者の行動に關係する。二、行動者のこの有意的對他關聯に依つて、行動そのものゝ過程は共同的制約を受ける。三、此の主觀的に意考された意味から演繹して、理解的に説明し得られる。

行動の外的世界殊に他の者の行動に對する關係に於ては、情緒活動や行動の經過に從つて隱顯する間接的な感情態等も關聯する。即ち憤怒、倨傲、羨望、嫉妬等と呼ばれる心的過程である。しかし理解的社會學が此等に對して關心する點は、生

理的或は從前の所謂精神物理的の現象形式ではない。また斯かる現象を特性付ける純然たる心理學上の與件例へば緊張、快不快の感情關係なども社會學的には關心せられない。理解的社會學は、行動が類型的に、有意味的に關聯せしめられてゐる性質、其の中でも殊に外的な方面に向つて、分化的に研究を進める。従つて理想類型として目的合理的な行動は、理解的社會學にとつて、まさに目的不合理的なものゝボルテエを測るに役立つものとなる。若し人が斯の如き、主觀的に意考された關聯性の意味を、曖昧な用語であるけれども、人間的態度の内面性と解するならば、其の場合にだけ、理解的社會學は此の種の現象を、全然内面からのみ觀察する科學であると言ふことが出来る。但し其現象の物的乃至心的素因を計量的に觀察するのではない。かゝる見地に立つて見れば、一つの態度の心理的性質の殊別性は、たゞそれだけで直接に吾人の注意を要求するものではない。何故ならば、行動の有意的關聯性が全く同等であると云ふことは、行動の過程内に見出される心的事象系列の同等と結合して居るものではないからである。寧ろ此の兩者に於ける差異が、それゝ他の側に於ける差異に依つて制約される可能性があると

云ふに止める方が確かである。

しかし例へば人間の態度の内でも、利得のための努力と云ふ如き範疇に屬するものは、直接には何等の心理學にも屬しない。或る營利的企畫の全たく同等の收益性に對して、二人の併立して追求し合ふ有利權者の全たく同等の努力は、單に相互に絶對的に異質的な特徵的性格を具へて、しかも共同的に行はれるだけではない。其等の努力は、全然同等なる過程と結果とに於て、正に相反する最終的心的序列乃至性格的特質に依つて直接に制約される。然るにこの場合、基準的作用をしてゐる、心理學にとつては最終的な目標方向なるものは、相互に何等の屬縁性を有することを、必要としない。斯う考へると、所謂共同關係以外に立つ人間的態度であつても、例へば主觀的には何等の關聯性の意味を有せぬ行動過程などでも、社會學的には無視せられないことが解る。行動の決定的條件、即ち其の規定根據は寧ろ此の種の行動そのものゝ中に藏されてゐる。それ自身としては意味の外にある外的世界即ち物と自然との過程に對して、行動が有意的に關係せしめられてゐることは、理解的科學にとつて、本質的に重要な事實である。然し主觀的な意味の

關聯性なき過程、例へば出産數、死亡數の移動過程、人類學的類型の淘汰過程、また純粹なる心理學的關聯の過程の如きものは、理解的社會學にとつてはたゞ、有意的な行動に指針を與へるやうな條件とか歸結とかとして役立つに過ぎない。恰も經濟人の理論的に構成された行動を對象とする社會經濟學が、氣候的關係或は動植物の生態關係等をも顧慮する所があるのであるのと同じである。例へば遺傳現象の如きは、主觀的に意考された意味に従つて觀察すれば、決して理解し得られる過程ではない。此の過程の成立條件を自然科學的に確定すること愈、精密なるに従つて、過程其の物の理解は益、困難となる。しかし例へば或種の社會權力に對する努力の成就を好都合ならしめるやうな、換言すれば此等の權力を獲得する機會の發生を好都合ならしめるやうな、一定の社會學的に注意すべき人間の性質及び衝動が存在することは事實である。此の實狀を測定して一般的には行動を合理的に指導する能力を、特殊的には他者にも知悉せしめ得べき一定の知的性質を、近似的に明瞭な關係に招來して理解するために、例へば頭蓋骨の統計的示表とか何物か特定の標徵に依り特殊化され得る人間の特定群の素性由來とか云ふ如きものを、利用

することが出来れば甚だ好都合である。そう云ふ場合には理解的社會學は此等の特別な事象に對して、人間の年齢の類型的階梯等の事實に對すると全く同じ程度の考慮を拂つて研究の材料となすであらう。然しそれは兎に角、本來の社會學的任務は次の諸點を明瞭に説明する所から初まると云はねばならない。一、外界の目的または自己固有の内的世界の目的に有意的に關聯せしめられてゐる行動は、知識的に如何なる性質、種類を有するか。二、特別な傳承的性質を賦せられた人間が、此等の行動の如何なるものに依つて、その性質の故に共同制約せられ或は恵まれたる、彼等の活動内容を遂行しやうと努めるか。三、何故に、また何の程度まで此の活動過程は遂行せられ、或は遂行せられないか。四、此の傳承的に制約せられた活動過程は、他者の有意的に關聯せしめられた態度に對して如何なる可解的結果を及ぼしてゐるか。

主觀的に明瞭且つ一義的に把握された目的を追求するために、主觀的に充分且

つ適當であると考へられた手段に従つて、主觀的に極めて合理的に指針されてゐる行動は、有意的に構成せられる行動の中でも最も直接に理解され易い種類のものである。此の手段が此の場合の目的に對して全然適應してゐると思はれる際に於て殊にさうである。此の種の行動を「説明」したと云へば、これを「心的事象關係」から説明したと云ふ意味ではない。この説明は對象の關係に對して抱く行動者の主觀的な期待(主觀的、目的的合理性)と、妥當的經驗に従つて當然抱かれるべき觀察者の期待(客觀的正當性の合理性)とから誘導せられる。一つの行動が其の形式に於て正當合理性の類型に適合することが愈、明確であれば其の過程の心理學的考察は概して有意味的には益、理解され難くなるだらう。

經濟的恐慌のやうな、行動者自身の目的合理的意思から、主觀的にかなり遠く懸け隔つた行動過程や、目的合理性の客觀的正當を認められない行動過程は、不合理的過程として説明すべきものである。斯かる過程を説明するには、先づそれが絶對的目的合理性及び絶對的正當合理性と云ふ二つの合理的理想類型の限界例に於て、如何に處置せらるべきかを確定する必要がある。其の處置が確定的に成功

すれば過程の因果的計量が行はれて、客觀的不合理合成分子並びに主觀的不合理合成分子も分析説明せられる。斯うして始めて行動に於ける心理的に説明し得られるもの即ち或る關聯として計量し得られるものが明白になる。然し此の關聯は客觀的に見れば錯誤的に誘導せられてゐる性質か、または主觀的に不合理な性質の上に成立するものである。而して後の場合には、經驗的規則の中でのみ把握せられ、しかも全たく理解し難い動機の上に立つか、それでなければ理解は出來るけれども目的合理的ではない明瞭な動機の上に立つか、孰れかである。

行動の過程に於て心理的側面で際立つて見えるものも、無論例外無しに一切の歴史的、社會學的計量に上るものである。例へば性衝動の如きは、最終的な直證性を有し且つ直接に把握し得られ、また此の意味で理解的な目的方向である。それは吾人にとって共感的に體得し得るものであるけれども、理解的心理學はこれを對象とする時、少からず當惑する。しかし社會學にとつては此の種の目的方向は、實際簡單な或る種類の與件として取扱はれるものであるに過ぎない。原則としては悉くの作爲關係(時に全く無意味でさへもある)の系列と同じく考へて取扱ふ

るべきものである。

主観的に云つて絶對的に目的合理的な指針を示す行動と、絶對的に理解し難い心的關聯との中間に、其の他の所謂心理的に理解し得られる目的不合理的な關係が位する。勿論現實に於て此の三者の限界が頗る曖昧にして流動的であるのは多言を要しない。主観的に見て目的合理的な方向に誘導された行動も、客觀的に妥當するものに向つて正當に指導された、即ち正當合理的な行動も、共にそれ自身二様な性質を具へてゐる。一つの行動を觀察者乃至研究者が説明しやうとする場合、彼にとつては其の行動が最高度に於て目的合理的であるやうに思はれても、行動者自身が其の行動を指針として行つた豫想なるものは、全く觀察者或は研究者にとつて妥當しないと云ふことが不可能ではないからである。

歴史の記述と社會學とは、少くとも意味の上から理解し得られる行動の現實過程が、或る理想類型に對して保有する關係を取扱はねばならない。その類型と云ふのは行動の現實過程が、若し研究者から云つて、(即ち客觀的に)妥當であるものに適合すべき筈であるならば、此の行動が必ず豫想するに相違ない正當類型を云ふ。

主觀的に有意的に指針せられた自態度(行爲と思惟)が、正當類型に適合し、背反し、多く或は少く近接しつゝ指導せられて行く事實は、事實そのものゝために言ひ換へれば其の指導的價値關係のために、社會學と歴史記述との、全部ではないが或る種の目的にとつて、最重要な事象關係となる。其の上さらに此の關係は行動の外的經過即ち歸結に對しての因果的要素となる。従つてこの事實關係の具體的歴史的豫備條件であつても、または類型的社會學的豫備條件であつても、共に其の經驗的過程は正當性の類型に對する一致、矛盾、距離の程度が理解的に判明するまで、言ひ換へれば、意味の上から充分且適當な原因推理の範疇に依つて説明せられるまで研究されなければならぬ。而して此の際類型と一致全等する事實關係があつたとすれば、それは意味から云つて最も充分且適當な因果關係であるが故に、また最も理解せられ易いものである。しかし行動の現實過程が事實上、正當類型に甚だしく接近してゐることが、主觀的に目的合理的な行動との必然的一致を意味するものではない。即ち事實上、客觀的に正當合理的な行動は、直ちに主觀的にも、一義的に完全に意識された目的に向ひ、充分且適當であると意考されて選擇され

た手段に従つて、指針される行動であるとは云ひ得ないのである。

4

廣く客觀的に見れば合理的に理解し得られる關聯方向の中には、往々にして行動者自身に依つて甚だ不充分に認識せられ、或は殆んど注意されない關聯、即ち此の意味に於ては主觀的に合理的方向を指さない關聯が纖り混ぜられてゐる。斯る關聯を發見することは、理解的心理學の主要任務の一部となる。斯様な場合には、主觀的に目的合理的なものと客觀的に正當合理的なものとは、甚だ甄別し難い關係内に結合してゐることがある。従つて其の説明は常に問題的な、限定された「所謂單に心理學的」なるものを、理解的に描寫するに止まる故に、如何にしても不精密な示唆たらざるを得ない。一方に於ては主觀的に認容せられない、表面は全く目的不合理的な態度の、比較的廣汎に通用する合理性がある。他方には文化史上に於て、千種萬様の證明乃至説明を見出し得べき事實關係がある。前者はその制約された合理性の故に理解的となるが、後の場合には、表面は直接に目的合理性を

以て制約された様に見える現象が、實際には全く不合理的動機に依つて、歴史的に人生内に招來されることが多い。而して其の表現形式は、時日の経過に連れて變化せる生活條件から、技巧的な正當合理性を多分に與へられて、其の結果「適者」として存續し、時には世界的に廣布して流通するやうになる。

社會學は勿論、行動を推進させる動機の存在を無視するものではない。衝動遂行の現實的満足其他之に類するものに對しても注意を拂ふ。然し或る動機系列の過程の直接的には理解し難い性質的成分が、此の關聯過程を制約する事實に對しては最も深甚なる注意を拂ふものである。けだし行動過程の此の種の成立要素は、行動自體の意味上の關係性及び結果的表現の種別を、最も深刻に共同規定するものである。これに對して本質的な注意を拂ふことは社會學の當然な任務である。行動を意味の關係性に於てのみ觀察すれば、全く相等しいものが、其の行動に參與する者自身の、純然たる量的差異のみを示す反動的速度の如何に依つては、時として其の行動の終局的效果に於て、極端に相違する過程を示すことがある。斯うして根源的には全く同様に編み出された動機の連鎖から、最初に於ては全く

氣質的な性格の差異のために、行動の有意的關係性は、結果に於て屢々意味的にも全く異質的に道程の上に偏進せしめられる。以上述べ來るところに従つて、理解的社會學の觀察目標とすべき人間の態度を擧げれば略々次の如くなるだらう。一、幾らかでも近似的に到達され得る正當性を有する類型。二、主觀的に目的合理性を以つて指針せられる類型。三、單に幾分でも主觀的に意識或は容認せられ、且つ幾分でも一義的に目的合理性を以つて指針せられる經驗的自態度。四、目的合理的には理解されないが、意味的に理解し得る過程を動機とする自態度。五、理解し難い要素に依つて甚だしく中斷せられ、または共同制約された過程を動機とする全體として意味的に理解し得られる自態度。六、人間の内部に在りまたは人間に即してゐる全たく理解し難い心的竝びに物的事態。

以上六種の對象は其の各々の間に、全く流動的な移動的限界を有して、相互に複雜な結合を示してゐる。

社會學の説明する所によれば、正當合理的に指針されてゐる一切の行動が、悉く主觀的に目的合理的に規定されるとは限つてゐない。また現實の行動を制約するものは、論理關係から合理的に結論される關聯ではなく、所謂心理學的關係過程であることも、また社會學の明瞭に認識する所である。然らば理解的に考察することゝ、因果的に計量的に説明することゝは、相互に何等の關係をも有せぬと云ふ假定は正當であらうか。兩者の仕事を見れば、確かに事實關係の反對極に立つて觀察を始めるやうである。例へば一つの人間的自態度に關する因果的觀察が、統計的に其の過程成立の繁度度數を測定したと假定する。しかしこの自態度は、斯る度數性の故に少しでも其の可解性を増減することはない。否それだけの觀察材料では、全然理解せられ得べき性質を發見し得ない。またこれとは反対に、單一的に理解され得る性質は、決してそれ自ら度數性を代表しない。例へば絕對的に主觀的な目的合理性の如きものは、最も理解され易きものであるが、度數性に對しては寧ろ衝突するやうな性質である。惟ふに社會學にとつては、意味の上から理解し得べき心理的な關聯を、殊に目的合理的に指針されてゐる動機過程を、因果律

的連鎖の一節として計量することは、寧ろ避けねばならない所であらう。

個々の具體的な關聯過程を意味の上から解釋することは、たゞそれだけとしては單に計量的觀察の假定たるに過ぎない。しかし、有意的な動機の系列が、既に其の中に存在することを豫想させるやうな機會に對して、或る測定の尺度が（勿論個々の場合に依つて量的に甚大の差等があるが）得られる時には、此の假定は大いに役立つものである。斯かる場合には、因果的連鎖の中に、目的合理的に指針された動機が、既に解釋的假定を経て纏り込まれてゐることが明らかである。従つて此の過程の因果關係は、一定の好都合な條件の下に於ては、其の妥當性に關する相對的單一證明に就て、また直接に統計的觀察に就て、充分な「説明」となる。また其の逆に實驗心理學上の多くの與件を包含する統計的與件なるものは、それが何等か理解的に解釋し得るものと含む態度の過程または結果として合成される場合には常に同時にそれが現實の具體的事例に就て、有意的に解釋されるのでなければ、吾人にとつては未だ「説明」せられたとは云はれない。

或る行動の正當合理性の程度は、經驗科學的操作にとつては、結局一個の經驗的

問題である。経験的操作の取扱ふものは、其の対象間の現實的關係であつて、それらにとつて本質的な論理的前堤は全たく問題とされない。従つて経験的操作は必然的に素朴現實主義を以つて、たゞ形式上に差別ある対象間の性質的種別を研究するのみである。それであるから數學的、論理的な命題とか規範等でも、社會學的操作の目的となる場合には、現實的自態度の便宜的習慣性の一種としてより以上に論理的な何物でもない。勿論それらの規範命題の正當合理的應用の程度が、統計的吟味の目標とされる時には、其の妥當は既に研究者の勞作の前提として受容されてゐるのである。それよりも更に吾人にとつて重大な問題は、経験的態度（行動）が正當合理性の類型に對する關係は、経験的過程の現實的、因果的な發展の要素となることである。此の事態を事態そのものとして表示する事は、研究の対象から經驗的性質を奪ひ去る如き目標方向ではない。それは價值關係に依つて規定せられ、指針せられるる理想類型と其の職能とを制約する目標方向である。

ここに於て歴史上の「合理的なるもの」の重要な、それ自體意味的に困難な問題が想起される。社會學の一般諸概念に照して考へれば、論理的に觀て、「正當類型」の使

用は、原則としては單に一般の理想類型を形作る場合の一例(屢々最も重要な類例となるが)であるに過ぎない。論理的原理から云つて此の仕事はまた、或る條件の下に於ては、研究の目的に従つて研究者は、合目的に選擇された誤謬類型の検討に引き當てるのみであると云ふこともできる。この場合に常に基準となるものは「妥當なるもの」に對する距離である。然し論理的には、一つの理想類型が意味的に理解し得る諸關聯から成立してゐても、特殊の無意味的關聯から構成されてゐても、其の間には何等の區別が無い。前者の場合には「妥當的規範」が理想類型を作る。而して此際、經驗的素材は「妥當範圍」の範疇を通じて、形造られるものではない筈である。後者の場合には、經驗的に理想類型に簡約された事實性が理想類型を作る。其の構成的理性は經驗的に事實から引き出される。「正當類型」が何の程度まで理想類型として、合目的であるかは全然價値の關係に依属せることである。

6

同じ個人を對象とする科學ではあっても、知識の分野に従つて操作上の任務も、

觀察の方法も自ら異なる、或者は個人を心理的に、或者は之を化學的に見る。其他兎に角之れを何等かの種類に屬する過程の複合物として取扱ふ。理解的社會學にとつては、それ自體としての個人とその行動過程とが、觀察の最低單位となる。何故ならば觀察の目標は理解と云ふ點にあるからである。意味の上から解釋し得る自態度の境界内に入り来るものは、悉く社會學的觀察の對象となる。また意味の無い自然であつても前者の條件として、或は前者の主觀的に關聯せしめられた地域として、觀察の範圍内に入る。以上の理由から、此の觀察の方式にとつて、個人は意味的關聯の限界であり、且つ其の唯一の保有者である。個人の假佯的表現形式にとらはれることは、この觀察にとつて警戒すべき所である。

行動の概念は直ちに行動其のものと、それを導く一個の固定的、連續的存在とを想起させる。言ひ換へれば、行動は一つの固有生活を營む人格的造形物の外衣に包まれて、吾人の記憶内に出現する。この理由は唯それを表はす言語そのものゝ特質に存するのみではなく、また吾人の思惟そのものゝ特質に存するものである。國家、組合、封建組織等の如き概念は、一般に社會學にとつて、人間の共同關係上の行

動を一定の種別に分属せしめて表示する範疇である。社會學の任務としては、これを「理解し得られる」行動に分析することを考へなければならない。言ひ換へれば、これに參與してゐる個別人の行動に分化せしめることを、觀察の目標方向としなければならない。この傾向は他の觀察方式にとつては、決して必然の方向ではないけれども、社會學にとつては本質的である。此の點に就て、殊に明確な區別の認められるのは、社會學的觀察の方式と法理的のそれとである。法理的觀察に於ては例へば事情の如何によつて、國家を個人と同じく「法的人格」として取扱ふ。何故かと云ふに法理學の客觀的意味解釋の上に指針されてゐる研究操作は、法文の當然妥當すべき意味内容に基いて運用せられる關係から、斯の如き概念上の補助手段をも、恐らく必須的に有効ならしめるからである。實際に於ては幼ない小兒に於ても態度の純粹事實性は目撃される。斯の如きものから意味的に理解し得べき行動へまでの推移過程は、經驗的理解を目標とする研究態度にとつて、全く運動的性質を具へてゐる。然るに一片の法令は胎兒をすら「法的人格」として取扱ふのである。これに反して、若し「法」が社會學の對象として觀察される時には、法律命

題の論理的に正當な、客觀的意味内容を確立することが課題となるのではない。

一つの行動があつて、其の決定要素または合成要素としての諸表象が、或る法文の意味内容及び妥當價值に對し、重要缺く可からざる役割をしてゐるとすれば、斯ういふ行動が問題となつて、其の法的性質が吟味されるのである。然し乍ら、行動に於ける此の種の妥當表象の事實的具體的な豫在を證明することは、社會學に對して如何なる處理を必要とするか。社會學的研究は先づ斯様な表象の存在すると云ふ眞實らしさを觀察する。法文が妥當する場合、法文の意味に關する經驗的に制約された表象が、一定の人々の思想内に支配的勢力を有するならば、一定の事情の下に於ては次の結果が生まれる。即ち行動は合理的に規定された「期待」に基いて指針される可能性がある。従つて具體的個人に對しても選擇的「機會」が與へられる。社會學の觀察はまづ此の關係を熟考することから出發すべきものである。具體的個人の態度に對して著しく影響する法文の經驗的妥當に關する、概念的、社會學的意義付けは、此の手續に依つて得られねばならない。

右に述べたやうな理由から、一般に使用される國家と云ふ言葉は、社會學的觀察

にとつては、ただ人間行動の特殊過程を示すものとして取扱はれる。たとへ此の言葉を法理科學と同じ用語形式に従つて使用するにしても、國家の法理的に「正當」な意義なるものは、社會學に於て意考されてゐる意味ではない。然しながら一切の社會學的觀察にとつて、次の如き手段を借らねばならないのは避け難い所である。社會學は類型的な諸範例の間に、到る所、常に介在する推移的過程を表示せる現實行動を、觀察するために法理的表現形式を使用しなければならない。何故ならば此の形式は、規範の推理的解釋に基く故に、銳利、明確であるからである。社會學は斯かる手段に依つて、其れらの行動に社會學本來の、法理的意義とは全く異つた意味を與へる。對象の種類性質に應じては更に進んで、共同生活的に體験された有意義の關聯過程、或は傳承的に昔から認知されてゐる關聯過程をも、其の他の關聯の定義に應用しなければならない。斯かる關聯其れ自體の意味は、後者の定義を待つて更に追加的に完成されるものである。此の種の定義の一として、共同關係的行動を擧げることが出来る。

いま二人の自轉車乗りが、偶然意思することなしに並走してゐたとする。たゞこれだけならば彼等の行動過程は共同關係的ではない。其の一人が先頭に立たうとして速力を早めたゝめに、他も亦速力を速めてこゝに競争を始めたとすれば、彼等の行動は相互に主觀的に關聯せしめられたものである。其際もし互に妨げ合つたり、避け合つたり、衝突したために財的和解に就て検査其他の處置を講じたりしたとすれば、其の過程は次第に共同的な複雜を加へる。日常生活に於ける吾人の行動は、然し尙これとは比ぶ可くも無い程複雜な共同的性質を示す。すべて主觀的に意味を有して、他人の態度乃至行動に關聯せしめられる人間の行動を、吾人は共同關係の行動と呼ぶ。

既に述べたやうに社會學的觀察の視野に入り來たるものは極めて多い。其の因果關係的計量にとつても、特に共同關係の行動のみが重要である筈はない。然し理解的立場から見て、此の種の行動は兎に角第一級程度の重要性を有する對象

であることは疑ふことが出来ない。いま共同關係の行動を觀るに、其の最も重要な規範的主成分をなすものは、必須缺く可からざる理ではないけれども、専ら次の二點にあるやうに思はれる。一、行動が他の者の一定の態度に對する期待に基いて有意思的に指針されて居ること。二、それ故に自己の行動の結果に對し、主觀的に評價せる機會(成算)に基いて、有意思的に指針されてゐること。斯の如き行動の理解を最も容易ならしめる重要な説明根據は、此の種の機會の客觀的成立である。即ち上述の如き期待が當然抱かれるといふ、まことらしさ、大小の量的差異こそあるが等しく「客觀的な可能判斷」で表はされる斯かるまことらしさの成立である。

其の次に注意しなければならないのは、行動者の主觀によつて有意的に懷抱された期待の實體如何と云ふ問題である。一般に目的合理的行動と定義されるものは、すべて何等か一定せる期待に從つて指針せられてゐる。いま直接に行動に指針的影響を有する期待を考へて見ると次の二つの場合がある。一、行動の地域として有意的に關聯せしめられた自然過程に對する期待。これは其の過程の経過が、行動者からの助力を要せずとも期待され得る場合と、行動の反作用として其の

出現すべきを目的とする行動に對し、發生することを期待される場合とある。二、
一の場合と同一の手續に依つて他の人の一定の態度に關して抱かれる期待。此
の二種類の期待が、これを懷抱する行動者自身の行動に、方向の指針を與へる職能
を有することは、兩者共に原則的には同一であるやうに思はれる。而して後者の
場合、即ち他人の一定の態度に關する行動者の期待は、主觀的に合理的な行動に於
ては次の點に成立の根據を有して居る。即ち行動者は、他の者の主觀的に有意思
的な態度を、期待することは可能であると信ずる。従つて斯かる態度の機會(成算)
を、一定の意味ある關聯から推して、豫め計量することが可能であると信ずる。勿
論この計量には、斯かる機會のまことらしさの程度が、雜多な量的差異を示すこと
は免れないのである。

さらに此の期待は、主觀的に次の様な強固な基礎を有してゐる。行動者は一人
或は多數の他の人間に自己を理解させることが出来る、彼等と和衷協同すること
が出来る、かかる和協の存續を行動者は、自己の主觀的に意考した意味に従つて、期
待せる機會に彼等から認めて貰ふことが出来ると信ずる。この關係から行動者

は、自分の行動を此等の期待に基いて目的合理的に誘導することが出来ると信じ、其の結果、此の種の期待の範囲を必然的に著しく押し廣めることになる。これは共同關係的行動に認められる特別な性質上の特徴である。さて共同關係的行動は第三者の行動に對する諸種の期待に基いて指針されてゐるとして、この事實だけで共同關係的行動の主觀的に意思せられた一切の意味が盡されるわけではない。例へば第三者に對して意味の上から關聯してゐる行動であつても、單に其の意味内容の主觀的に信ぜられる價値に基いて指針されるものがある。斯かる場合には全たく期待指針的ではなくて、價値指針的である。意味内容に義務の概念の包括される行動の如きは、概ね此の類である。また前述の如き期待の内容となるものは、第三者の表現的な行動過程によつて作られるばかりではなく、其の内面的な自態度のみに依つても作られる。であるから結局、自己の態度が意味を持つて第三者の有意思的態度に關聯せしめられると云ふ事實の理想類型から、單に第三者的自態度が觀察の對象として入り來たる場合までの、限界推移は經驗的に見て全たく流動的であり曖昧であると云はねばならない。有意的行動に對する期

待に基いて指針される行動は、たゞ合理的限界例として妥當するに過ぎない。共同關係的行動を要約して定義すれば次の如くなるだらう。一、他の個人或は個人等の現實的自態度、或は表象された自態度に對する、一個人の歴史的に觀察された自態度。二、上述の如き他者の自態度に對する、一個人の客觀的に「可能な」或は「まことらしい」理論的に構成された自態度。この二種の性質は共同關係的行動の一種である社會聯合的行動(或は契約的行動と云ふことも出来る)に就ても、正しく適用され得るものである。

8

共同關係に基く行動のうちがあつて次の場合にあてはまるものは、これを特に社會聯合的行動と名づける。一、行動が特に秩序に根柢を置いて懷抱された期待に基き、有意味的に指針される時。二、行動者が聯合者即ち社會化された人々の、結果として期待される行動を、顧慮することに依つて、秩序の規範が純粹に目的合理的に遵奉される時。三、行動の有意味なる指針が、主觀的に目的合理的に生起した

時。命令的勢力を有する規範的秩序と云ふのは、純然たる経験的意味で云へば、一、一方的な、合理的限界例に於て表現し得る、一つの要望、人が他の人に對して有する要望である。二、限界例に於て表現し得る、人間相互間の双方的釋明であり、次の主觀的意味内容を持つ。即ち行動の一定種類は期待の中にも想定または豫測される。さらに其種類に近似せる一切のものも、其の期待に従つて整頓される。

行動が或る制定された秩序に基いて、主觀的意味を以つて指導されると云ふことは、即ち社會的に結ばれた人々が、主觀的に期待する行動に對して、彼等自身の現實的行動が客觀的に適合することを意味してゐる。しかし制定された秩序の意味即ち期待に基いて整へられた自身の行動と、また同様にして他人から期待された行動とは、共に社會聯合せる人々の中の個々の人に依つては、相互の間に多少の差異ある意味内容を以つて把握される。言ひ換へると一つの行動は、其れに參加せる個々の人々に依つて、すべて同一であると考へられた秩序に、主觀的には適合して指導されても、それは必ずしも客觀的に同様な場合に於ける同一種類の行動ではない。

さらにまた制約的秩序に關する行動の指針は次のやうな場合にも成立する。

即ち其の秩序の、主觀的に把握された意味に對して、社會聯合人中の一人から反抗的に行動される。例へばトランプを弄ぶ人々の中、誰か一人自身が主觀的に把握してゐる制約的秩序の意味内容に對して、意識して即ち故意に矛盾して、云ひ換へれば不正な札の引き方をしたとしても、彼の行動は矢張り仲間として其の他の人々の行動と結び付けられてゐる。またもし其の時に爾餘の人々の中で、彼と其の上に競戦を續けることを避けた人があつたとすれば、其の人はそこで社會聯合的關係を脱したわけとなる。普通に犯罪者と考へられるものは、かかる制約的秩序に對して、主觀的に意識して意味の上から衝突するやうな行動をするものを云ふのであるが、それでもなほ彼等が自身の行爲または人格的存在を隱滅しやうと努める點に於て、やはり其の秩序に基いて彼の態度を指針してゐる。それ故に個々の行動者が自身の行動を、彼等に依つて主觀的に把握された意味内容に、恒續的に適合するやうに指針すると云ふことは、一つの目的合理的な制約的秩序の經驗的妥當を證明するために決定的な重要性を有するものではない。制約的秩序は寧

ろ次の二點に重要な意義を有してゐる。一、事實上、平均して個々の人々は、トランプに於ける不正者の例のやうに、他の社會聯合人達が其の態度を、平均的に見て制約的秩序の存續を彼等の行動の規矩として居るかのやうに、形成するであらうと云ふ期待を、主觀的に懷抱する。二、個々の人々は平均して、人間の諸態度の機會に關し平均的に適用された判断に従つて、斯かる態度の期待を客觀的に懷抱することが出来る。論理的に見れば此の二つのものは全たく相反する事柄である。一つは觀察の對象となつてゐる行動者に於て、主觀的に豫在する態度の實體であり、觀察者からは平均的に存在すると認知される態度の實體である。第二のものは觀察者が、行動參與者の眞實らしい知識乃至思惟の習慣を、客觀的に顧慮して計量すべき機會である。

然し社會學の一般的概念の形成には、行動參與者にも主觀的に存在する把握能力、上述の機會を評價するに必要と考へられる此の能力の、實際的存在を表はす平均的尺度が尊重される。即ち社會學はすべて理想類型的に前提して、客觀的に實在する平均的機會は、目的合理的行動者に依つても亦、主觀的に近似的に計量され

ると言ふ。従つて社會學にとつては、一秩序の經驗的妥當は、上述の如き平均的期待の客觀性の上に成立するものである。言ひ換へれば吾人は上述のやうな平均的に眞實らしく見做される事實計量の結果に従つて、意味內容の上から主觀的にこれら計量に基いて指針される行動を、充分且つ適當に因果付け得るものであると考へる。それ故に斯かる場合には、可能的期待の客觀的に評價し得られる機會は、また行動者の上述の如き期待のまことらしい存在に對する、充分な理解的認識根據として役立つものである。事實上、斯ういふ場合に兩者の表現が同一化される傾向があるのは避け難い所である。けれども兩者の間に横はる論理的溝渠は、勿論そのために撥無されることは出來ない。たゞ理解的な經驗上の考察に従ふ意味で、右に述べたやうな機會は、行動者の主觀的期待に對する基礎として役立つやうに、平均的に適當して居り、従つて事實上にも相當著しい程度まで有效であると、客觀的可能判斷を下すことが直證的に出來るだけである。

これまで述べた所に依つて既に全たく明白なことであるが、論理的にまことらしい、排他的交替詞、社會聯合の存續と非存續との間には、經驗的には其の間の過渡

部分に隙間もない目盛が刻まれてゐることを知らねばならない。再び出来るだけ單純化した限界例をとつて考へて見る。トランプを弄ぶ一團の人々のすべてが、協定せる遊び方の規則がもはや存續して居ないこと、言ひ換へると計算の際に規範的に設定さるべき何等の機會も客觀的にもはや存在せぬこと、従つて主觀的にも、かかる機會が期待されないこと、互にすべて相對的に認知した時には、その遊び方の秩序に關する限りの社會聯合過程は消滅したものと云へる。或はまた他人の生活を妨げた者が、秩序に對する反抗そのものは彼に對して何等其の結果を豫見せしめるものではないから、彼が意識して破壊した秩序のために、概して規範的に苦しめられる場合には、其の秩序自體の經驗的 existence が彼から失はれ、従つて破壊者の關係せる社會化過程は其處に成立しないわけである。一般に社會聯合關係の成立を認められるのは、次の場合である。社會聯合的秩序に依つて、平均的意味から指針されてる行動が、實際的に觀察され得る範圍内で行はれる限り社會聯合は成立する。然しこれとても甚だ流動的な事態であることを免れない。

右に述べた所で明白にされたのであるが、個人の現實行動は主觀的に有意味的に、二つ以上の秩序に基いて指針されることも、當然あり得る。しかもそう云ふ秩序は便宜的な思惟の習慣に従へば、意味的には相互に矛盾するけれども、經驗的には共に相並んで妥當するのである。例へば吾人の普通に云ふ「立法」の意味に關する平均的な支配的觀念から云へば、決闘は絶對に禁止されて居る。ところが妥當するものとして認容されてゐる社會的慣習の意味に基く、或る廣汎に流布せられた表象は、かへつて決闘の敢行を命令する。或る個人が決闘を敢行する時には彼は自分の行動を此の種の便宜的習慣的秩序に基いて指針するのである。しかるに彼が其の行動を隠蔽しやうと努めるのは、法的秩序に従つてそれを指針するのである。而して双方の秩序は共に、行動の主觀的な有意味的な指針に對し、平均的に期待し得る妥當性を、一言にして言へば、經驗的妥當性を有してゐる。ただ其の實際的效果に到つては場合に依つて差異多きを免れない。いまの場合には然し、

経験的妥當の事實、即ち行動が斯かる秩序の主觀的に把握された意味に基いて、有意識的に指針せられて居る事實は、二種の秩序の双方共にこれを歸せしめることが出来る。一秩序の経験的妥當を規範的に表現すれば、吾人はこれを其の秩序が「遵奉される」機會であると見るものである。

これを言ひ換へると斯う云ふ意味になる。社會聯合された人々は、他人の平均的に見て秩序に合致する態度を、そのまことらしさに依つてあてにする。また從つて當然平均的には彼等自身の行動をも、他の人々からの同じやうな期待の意味を、主觀的に把握することに依つて整頓する。斯ういふ種類のものが即ち合秩序的社會行動である。一つの秩序の経験的妥當は社會聯合的な人々の、現實的態度に關する期待が、平均的に基礎付けられてゐると云ふ點のみで、成立するのではないと云ふことは、此の場合たゞ最も合理的な、社會學的に云へば最も可把握的な意味付けであると云ふに過ぎない。もし行動のすべての參與者が、單に絶對的に他の者の態度に對する期待に基いて、自己の行動を指針したとすれば、此等の個々の人々の態度は、孰れもたゞ單純な「共同關係的行動」の絶對的限界例であるに止まる。

而して同時にまた此の種の期待そのものゝ絶對的なフレクシビリテーを示すものである。また斯ういふ期待が其の平均的なまことらしさに於て基礎付けられること愈、深きに従つて、行動參與者が自身の態度を單に他人の行動に對する期待に基いて指針するばかりでなく、彼自身の内に主觀的見解の相對的規矩を擴張せしめるることは愈、大を加へるであらう。斯くして主觀的に意味的に把握された行動の適法性は、行動者にとつて、秩序其物と結合的なものと見られるやうになる。

10

社會學の對象と方法とに就ては現在に於ても異説頗る多く、殆んど其の歸屬する所を知らない。然し以上述べ来る所に依つて、所謂理解的社會學の操作方法の大體の方向及びこれが對象の輪廓は略、明らかにせられたやうに思ふ。此の意味に於ける社會學は、究極、社會行動(共同關係的行動一切を云ふ)の科學である。既に繰り返し説明した通り、行動とは行動者の主觀的な意味の附加せられた、一切の人間的態度を言ふ。無論それが內的或は外的の行爲、不作爲、または陰忍等であつて

も構はない。而して社會的行動とは、行動者に依つて主觀的に意考せられた意味に従へば、他の者の態度に關聯せしめられて居り、且つそれに基いて行動の過程も指針されてゐる、斯かる行動を言ふ。こゝに説くやうな有思想的行動と、主觀的に意考された意味の附加せられない、全く反作用的な自態度との限界は、全然流行的であつて明瞭でない。社會學的觀察に對して舉示せらるべき一切の自態度の中、最も重要な一部分が此の兩者の限界に跨がつて居る。純粹に傳承的な行動の如きは其の尤なるものである。

意味のある行動、即ち理解し得られる行動は多くの場合、心理學的過程には認め難い。たゞ僅かの場合に、専門家に依つてのみ認められる。神秘的な、從つて言葉では充分適當に傳達し得ない過程は、専門家にとつても親しみ難く、充分には理解し得られない體験である。これに反して自己も亦、同一の行動をすることが出来る、と云ふ能力は、或る行動を理解し得ると云ふことの必要な前提ではない。既に云つた通り、「シイザアを理解するためには、シイザアたる必要はない」。完全に後より體驗して見ることが出来ると云ふことは、理解の直證にとつて、重要ではあるけれ

ども、意味解釋の絶對的條件ではない。一つの過程の意味に關して、理解し得られる成立部分と理解し得られない成立部分とは、其の過程中に於て屢々混淆せられ、結合せられてゐる。

いま、で絶えず用ひて來た意味(場合に依つては意思ともいふ)と云ふ言葉は、吾人の用途に於ては次の經驗的內容を持つ。一、一つの歴史的に與へられた場合に於て、一人の行動者に依つて主觀的に意考された意味。二、與へられた場合の一つの群に於て、多くの行動者等に依つて平均的にまた近似的に、主觀的に意考された意味。三、一つの概念的に構成された純粹類型に於て、一人または多數の類型として考へられる行動者に依つて、主觀的に意考された意味。斯ういふ性質のものであるからそれは決して、例へば客觀的に「正當な意味」であるとか、または一つの形而上學的基礎の上に求められた「真正な意味」であるとかいふ類のものではない。此處に歴史及び社會學の如き、行動の經驗的科學と、對象に就て「正當的」「妥當的」意味を究めやうとする法理學、論理學、倫理學、美學等の如き、一切の獨斷的科學との間に存する區別がある。

世論 Max Weber は、其の宗教社會學に關する大論策を除外するも尙、斷片的なれども、學徒の注目すぐれ文献甚だ多し。こゝに其の部分的説述を試みたる Ueber einige Kategorien der verstehenden Soziologie. の如きも其一つなるべし。たゞ彼が行文頗る緻密にして却つて甚だ解し易からず。其の真意を誤り傳へらんことを獨り諒めたり。所論の註釋たるべき材料の蒐集は種々の都合によりて未だ果さず。勿急に筆を投じ編輯者に對しては申譯無く次第なり。